



contents

表紙◎  
パウル・クレーのノート  
"Beiträge zur bildnerischen Formlehre"  
original notebook of  
Paul Klee (p.174, 175)  
Zentrum Paul Klee  
Fotoarchiv, Bern  
協力：日本パウル・クレー協会

2 技術に会う

立ったまま手漕ぎ舟で渡る 大竹昭子

4 「特集」

人間・自然系

6 人間・自然系のパラダイム

——対立を乗り越えるために 丸山康司

9 里山再生

——日本の風土が生んだ人間・自然系  
武内和彦／兵庫県豊岡市

14 林業の再生が日本の森林を甦らせる

竹内典之／池川林産企業組合

19 都市に森を！

——潜在自然植生の可能性  
宮脇昭／横浜国立大学

22

永瀬唯のサイエンス・パスベクティブ  
電池イノベーション  
——大容量、高電圧、そして軽量小型化

28

新学入門 1  
顔学 原島博

30

HITACHI FILE  
◎毎日の安心、万が一の安全をサポートする「目  
新世代ステレオカメラ

◎日立紀行 5  
猿橋

◎ダントツさんが行く！ 12  
過熱水蒸気オーブンレンジ

◎技術の日立・今昔 9  
電車

# 立　　っ　　た　　ま　　ま　　手　　漕　　ぎ　　舟　　で　　渡　　る

文・写真

## 大竹昭子

ある年の冬、仕事でウエネツアに10日ほど滞在したことがある。汽水湖の人工島にできたこの町は、冬になるとここがイタリアかと思つほど明るく乾いた空気に見放される。運河から冷たい風が始終吹きあげ、寒くて湿気がひどい。まわりを水に囲まれているというのは、こんなにもじめじめして暗いものなのかと驚かされた。

しかしそれを差し引いても、車が一台も通らない迷路の魅力は絶大だった。興奮した私はマフラーを首にぐるぐる巻きにして街を歩きまわった。角を曲がるとききなり水路が現れる。魚のかたちの島を、あみだ籤のような運河がピース状に分割しているのだ。そしてそこを行き交う大小さまざまな船。レストランに食品を運ぶのもホテルにシーツやトイレットペーパーを届けるのも、ここでは船の仕事だった。

橋の上からカナル・グランデを見下ろしていたある朝、モーター付きの運搬船に交じって手漕ぎの舟が進んでくるのに気が付いた。ゴンドラと違って漕ぎ手が前後に二人いて、運河の右岸と左岸をジグザグに縫い合わせるように往復している。

トラゲットという渡し舟だった。朝の通勤時間帯には対岸に渡るのに利用者が多い。船べりの低い小舟に乗客が立ったまま運ばれていくので、遠目に見ると、人間というよりカイト大根のバッグが流れているようでおかしい。

ところがこの舟に実際に乗ってみて驚いた。み

んな平然と立っているのが信じられないほど揺れるのである。私は舟に足を踏み入れたとたん怖くなつて底にしゃがみ込んでしまった。なにせ下が水である。おまけに船べりが低い。まるで板の上に乗っているような心細さなのである。よく吊り革につかまらずに電車に乗ってバランス感覚を鍛えている人がいるが、あれよりもっと技術がいる。

私は最後まで立ち上がることができず、子供のよつに舟底にしがみついたままだった。すぐ目の前に細いハイヒールの足があった。スカート姿で大きなバッグを提げ、もちろんどこにもつかまらずに、両足を心持ち開いたまま微動だにせず運ばれていくのに瞠目した。

隅田川でリバークルーズを楽しむことは私たちにもある。だが、あそこでは人が揺れに合わせる必要はなく、ただ座っていれば目的地に運ばれていく。それに比べるとトラゲットは非情だ。乗り手に水上にいることをたえず囁きかけては足の裏に仕事をさせる。私たちの足が退化させてしまった技によって小舟の運航が叶っているのだ。

どこを向いても水ばかりの水上都市では、人々はたえず揺れるものを目にし、揺れる乗物に乗って、水面のあてにならなさを足の裏に感じつつ暮らしている。大地のような揺るぎないものの上で営まれる生活とは、別の身体感覚が育まれるのだから。私は自分の無様さを嘆きつつ、岸に上がっていくハイヒールの足に拍手を送った。

おおたけ・あきこ……1950年東京生まれ。作家。都市、写真、アートなどについての評論も行う。現在、トークと朗読の会「カタリココ」を多彩なゲストを招いて開催中。著書は『バリの魂、バリの夢』（講談社文庫）、『透きとおった魚——沖縄南帰行』（文藝春秋）、『眼の狩人——戦後写真家たちが描いた軌跡』（ちくま文庫）、『凶鑑少年』（小学館）、『きみのいる生活』（文藝春秋）ほか。最新刊はプロ・アマを問わずにセレクトした100点の写真に文章をつけた『この写真がすごい2008』（朝日出版社）。大竹昭子ブログ：<http://booklog.kinokuniya.co.jp/ohtake/>（紀伊國屋書店「書評空間」内）